



神戸におけるカトリックの展開：宗教地理学の研究 視点に関する検討を通して

阪野，祐介

(Citation)

兵庫地理, 53:3-12

(Issue Date)

2008-03-31

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90002460>



神戸におけるカトリックの展開

—宗教地理学の研究視点に関する検討を通して—

阪野 祐介

1. はじめに

神戸では異国情緒あふれる景観を至るところでみることができる。ひとつには、幕末の開港時に設置された外国人居留地の区画があげられる。居留地時代以来の残存する建物は少ないものの、その後に建てられた近代建築もあり、多くの観光客が訪れるだけの居留地、明治・大正期の面影が残されている。それは、神戸が近代の幕開けとともに、日本の開港都市のひとつとして都市部の形成が展開したことによる。また、居留地外へと外国人の居住地が拡大したことで形成された現在の三宮駅の北、つまり山側に広がる北野の異人館街の景観もそうである。北野異人館街には洋館とともに、多くのさまざまな宗教施設が立地しており、神戸の景観を特異なものとしている。

現在、グローバル化が進むなか民族的アイデンティティや地域アイデンティティをめぐる諸問題が表面化してきている。そうしたなかでさまざまな場面において多文化共生の時代への対処が叫ばれはじめている。それは日本社会も例外ではない。そうした背景から、都市が発展してゆく過程において、宗教施設の立地の変遷や、教会という宗教空間内の変容、さらには地域的・宗教的・民族的アイデンティティへの関心が高まりつつあり、都市における宗教に関する研究は意義があるといえるだろう。

宗教施設というのは、周知のとおり、教義によって規定される宗教がもつ世界観が建築物の形態や配置に反映される空間であると同時に、宗教集団の諸活動が行われ、集団内の多様性や地域社会との諸関係が表れる空間でもある。空間スケールを都市レベルへと拡大すると、都市形成においても、宗教施設の立地やその変遷から、人びとの多様な社会的・文化的行為や社会と宗教との関係を見出すことができるだろう。

そして、これまで筆者は、日本におけるカトリ

ックを主な対象として研究を進めてきた。その根底にある視座は、宗教と社会との関係にある。集団改宗という現象を通して宗教と社会構造との相互作用的关系や、巡礼地形成からみた多様な人びとの関係とその諸関係と場所との関係、さらには、宗教的行事を国家や地域における社会的・文化的コンテキストから読み解いてきた。

本稿では、開港後、関西のなかいち早く聖堂が建設された神戸のカトリック教会の展開を事例として取り上げながら、宗教と場所、共同体、アイデンティティに関して考察を進め、地理学における宗教研究の枠組みについて言及することを目的とする。

2. 宗教と空間、場所をめぐる研究視点

地理学における宗教に関する研究では、宗教を、「文化の基礎をなし、社会構造における重要な要素」(de Blij and Muller, 1986)のひとつとみなしている。現代地理学の潮流において、ソーファー(1971)が宗教地理学という分野の確立を提言した。その著書のなかで、宗教現象は人間の個人的宗教体験に基づくものであるため、個人の宗教体験のように空間に直接の顕れをもたない現象は、地理学の研究対象としては扱うことの難しさを指摘している。そして、「制度化された聖なる信念と儀礼と社会的行為の体系」¹⁾として宗教を捉え、「組織化された宗教体系と、文化体系によって形成された制度化された宗教行動」が空間的に、景観上にあるいは社会との関係のなかで相互に関連しあっているのかを問うことで、宗教を地理学の研究対象とすることができるとした。

それにもかかわらず、この提言以降も、地理学においては宗教を他の経済的、政治的、社会的、文化的諸要素から引き離すことにむしろ重点が置かれ研究が行われてきた。この問題は、聖なるものとは何であるのかという根源的な問いと関連す

るものである。これは宗教現象を明らかにすることと、神学的な問いにおける捉え方の差異、つまり宗教現象をめぐる定義²⁾が曖昧なままに置かれ研究が行われてきたことに起因するといえよう。

Tuan (1978) が述べるように、われわれは、ひとつの宗教施設をみるとき、本質的にそこが聖なる空間として捉えてしまう傾向がある。この問題に関して、Kong (2001) が、俗なるものから聖なるものを、政治的なものから詩学的なものの分離として指摘した。そして、Kong らによって、1990年代以降、宗教地理学にも明るい兆しが見られ、宗教に関して社会と空間の構造と意味を理解する研究視点が提言された。そこでは、社会と空間の構造、意味を理解するうえで、宗教的実践、すなわち制度化された組織や個人的経験の両側面の分析が、宗教的生活のみならず、社会の編成・再編成の分析を含んでいることを認識する必要が主張され始めた。実際に、宗教という要素が、民族、階級、ナショナリティ、ジェンダー、アイデンティティといった重要なタームとならび、個人的、地域的、国家的レベルでの制度化された空間や場所の複雑な関係や政治性を問うことにおいて、地理学と深く交差することを多くの地理学者が認識してきていたのである³⁾。

そしてKong (2001) は、今後の宗教地理学の展望・課題として大きく3点をあげている。第1に、「公的な聖なる」空間の背後にある分析の場を拡大する可能性。第2に、宗教を本質的なカテゴリーではなく、歴史的かつ空間的特性を分析する一要素として扱うこと。第3に、身体、ローカル、リージョナル、ナショナル、グローバルといったマルチ・スケールでの分析の必要性を説いている。

そして最後に、エリアーズ (1993) の以下の言葉が宗教と空間・場所に関する研究視点としてもひとつの重要な示唆を含んでいる。「宗教的体験には、経済的・文化的ならびに社会的相違、一言でいえば、歴史に基づいて説明される差異がある」と。このことが示すことは、空間や場所をめぐる宗教的アイデンティティの構造を理解するときに、それぞれの宗教がもつ歴史的文脈がいかに重要であるかを示しているだろう。あらゆる宗教は、固

有の歴史的・地理的背景を典拠として自らの正当性を示威すると考えられる。その根拠は、典礼や諸文書、教義、儀礼などによって場所を通して成文化され、自らのアイデンティティの構築を試みるのである。それゆえに、その差異を生じさせる場や過程に存在する対立や競合、調整といった人びとのいとなみの考察を通して、我々は時間的かつ空間的な宗教構造とそれに関わる諸作用を明らかにすることができると考えられる。

以上の宗教地理学の近年の展望を足がかりとしながら、まず次章では、日本におけるカトリックの概要について述べることにする。

3. 日本におけるカトリックの概要

1549年に聖フランシスコ・ザビエルが日本へ上陸し、日本で最初のカトリックの布教活動が行われた。既存の仏教勢力と敵対的であった信長によりカトリックは保護の確約をうけ、九州を中心として全国的にキリシタンの信徒数は伸びを見せていた。豊臣秀吉は九州に攻め入った1587年にバテレン追放令を発令したが、キリシタン自体は黙認されていたため、徳川幕府が成立した頃には、その数70万人以上と報告されている⁴⁾。江戸時代に入り、キリシタンの徹底的な禁制が敷かれ、その後も迫害と抵抗が繰り返されながら、徐々に日本社会の表からキリシタンは姿を消すこととなった。このキリシタン迫害により殉教したキリシタンたちをめぐる史実は、明治以降、時代の流れのなかで盛衰はあるものの積極的に発掘され、現在のカトリック信徒らに共有される記憶としてあり続けている。

19世紀中ごろ、既に徳川幕府は衰退の一途をたどり、終焉を迎えつつあった。その頃、再び外国人宣教師等が日本へ上陸しはじめていた。1865年2月19日にフューレ、プチジャンの二人の神父のもと、長崎に大浦天主堂が建てられ、日本でのキリスト教の宣教が再開された。翌月の17日に15人の男女が大浦天主堂を訪れ、キリシタンは再度日本の歴史の表舞台へと登場することとなった。ただし、明治初期においては、政府の宗教政策は徳川幕府のものを踏襲し、キリスト教は禁

教の対象であり続けていた。

こうした時代にあり、神戸は幕末に開港された港町のひとつであったことから、外国人居留地が設定された。1970 年には、この居留地内の仲町 37 番（現在の大丸神戸店の裏）に、関西において最初の聖堂が完成をみる。この聖堂が現在のカトリック神戸中央教会の始まりであったが、聖堂建設の目的はあくまでも、日本に居留する外国人のためのものであった。ただし当時期、浦上四番くずれ⁵⁾がおこっており、全国各地に浦上キリシタン 3000 人以上が流配されていた。そして、大阪のクゼン神父がプチジャン神父に宛てた書簡によると、「夜中庭園の門を激しく叩く音が聞え、それと共に大声が耳に入りました。急いで駆け付けて見ると、半身を露出し、腰は梓の弓に曲り、頭には大きな笠を戴き、腰に扇を挟める一人の老翁が立つて居るのです。私は喫驚しました。よくよく見れば流罪に処せられた信徒の一人ではありませんか。彼は秘蹟を授かるが為に兵庫へ行き、私が大阪に居住せる由を聞き、一夜を此処に明かして、その途を続け、囚れの地へ帰るべく立寄った」⁶⁾とある。兵庫、つまりは神戸に天主堂（カトリック教会）が創設されたことが流刑された各地の浦上キリシタンの間に知れ渡っていたことがわかる。

1873 年に、「切支丹禁止、邪宗門禁止」の高札が撤去され、キリスト教布教は公認されることとなった。解禁以降は、カトリックよりもプロテスタントの活動のほうが発達で、とくに教育の側面での社会的貢献が大きく、明治の文明開化の風潮は、英語教育の、また女子教育の到来であった。そして今日の日本のキリスト教系大学の多くが、明治時代に開学している。その点では、カトリックの大学創立は、上智大学で大正に入ってからでありプロテスタントに比べ遅れて始まっていることは興味深い。神戸では、現在の神戸女学院大学（開学 1875 年）や聖和大学（同 1880）、関西学院大学（同 1889 年）、神戸松蔭女子大学（同 1892）などが明治に創立したプロテスタントの大学である。カトリックだと神戸海星女子大学があるが、

第 1 表 2000 年におけるカトリック信徒数

教区	都道府県	信徒数	信徒率
札幌教区	北海道	17,510	0.308
		17,510	0.308
仙台教区	宮城県 青森県 岩手県 福島県	10,869	0.147
		4,052	0.171
		2,150	0.146
		1,738	0.123
		2,929	0.138
新潟教区	新潟県 山形県 秋田県	7,414	0.151
		4,825	0.195
		820	0.066
		1,769	0.149
浦和教区	埼玉県 栃木県 群馬県 茨城県	19,387	0.139
		10,383	0.150
		2,633	0.131
		3,461	0.171
		2,910	0.097
東京教区	東京都 千葉県	84,733	0.471
		73,605	0.610
		11,128	0.188
横浜教区	神奈川県 静岡県 長野県 山梨県	51,190	0.333
		38,997	0.459
		7,163	0.190
		3,697	0.167
		1,333	0.150
名古屋教区	愛知県 岐阜県 石川県 福井県 富山県	24,406	0.199
		18,690	0.265
		2,403	0.114
		1,865	0.158
		584	0.070
		864	0.077
京都教区	京都府 滋賀県 奈良県 三重県	19,126	0.262
		10,626	0.402
		2,130	0.159
		3,416	0.237
		2,954	0.159
大阪教区	大阪府 兵庫県 和歌山県	55,146	0.357
		29,446	0.334
		22,916	0.413
		2,784	0.260
広島教区	広島県 山口県 島根県 岡山県 鳥取県	21,204	0.274
		8,635	0.300
		5,496	0.360
		1,050	0.138
		4,939	0.253
		1,084	0.177
高松教区	香川県 愛媛県 徳島県 高知県	5,328	0.128
		1,578	0.154
		2,226	0.149
		712	0.086
		812	0.100
福岡教区	福岡県 佐賀県 熊本県	31,241	0.403
		24,345	0.485
		2,804	0.320
		4,092	0.220
長崎教区	長崎県	67,552	4.454
		67,552	4.454
大分教区	大分県 宮崎県	5,591	0.234
		2,705	0.222
		2,886	0.247
鹿児島教区	鹿児島県	9,126	0.511
		9,126	0.511
沖縄教区	沖縄県	6,121	0.464
		6,121	0.464
総 計		435,944	0.343

注) 信徒数はカトリック中央協議会（2000）、信徒率は、総務省統計局（2001）の人口数値をもとに算出。

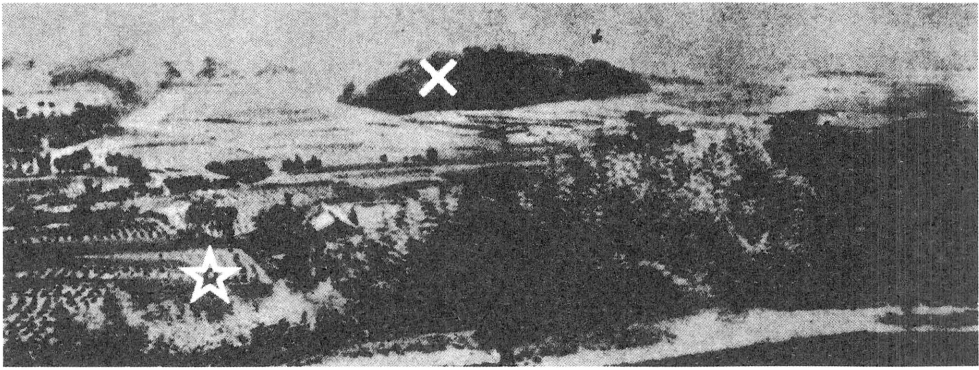


写真1 神戸の中心地（明治初頃。☆印が現カトリック神戸中央教会の位置。×印は生田神社を示す。）

注）カトリック大阪司教区（1966），p. 24 より。

創立は戦後である。

次に、現在の信徒の分布から日本におけるカトリックの概要について述べる。資料としては少し古くなるが、都道府県別で把握できるため、2000年の統計を用いて、信徒数及び信徒率を第1表に示した。現在の日本におけるキリスト教信者の割合は、総人口のおよそ1%程度といわれている。日本のカトリックの組織体系は、第1表のとおり47都道府県を16教区からなる。2000年における教勢は、教会数が1034ヶ所（巡回教会・集会所を含む）、修道院987ヶ所、聖職者数1794人、一般信徒数43万5944人となっている。信徒率は、わずか0.343%にすぎないが、社会的、文化的影響としてのキリスト教の位置は信徒数が示す以上であるだろう。

都道府県別に信徒の分布をみると、東京（73,605人）、長崎（67,552人）が突出する形で上位を占め、次いで神奈川（38,997人）、大阪（29,446人）、福岡（24,345人）、兵庫（22,916人）が2万人以上となっている。信徒率では、長崎の4.454%が最も高く群をぬいているが、その要因は歴史的背景から容易に想像できよう。長崎以外をみると、全国平均0.343%以上となっているのは、東京、神奈川、京都、兵庫、山口、福岡、鹿児島、沖縄の都府県である。福岡や山口に関しては、長崎と同様にカトリック伝来以来の歴史的背景による信徒率の高さが理解される。東京、神奈川、京都、兵庫などは、大都市圏を形成する都

府県であるとともに、東京、大阪という日本の管区にあたる教区あるいは隣接地域であることから、近代以降においてカトリックが都市部において宣教され、普及したことによると考えられる。しかし、千葉県や埼玉県などは、大都市周辺に位置しながらも信徒率が低いことにも注意を払う必要があるだろう。それは、教会側の宣教による影響ばかりが原因ではないことを示していることといえよう。これらを踏まえると、とくに近代以降におけるカトリックの展開の特徴を理解するうえで、布教活動という要素以外に、さらには各地域における宗教的背景や社会的状況との関連から捉える必要性が十分に理解されよう。

以上が、日本におけるカトリックの概要であるが、兵庫県の信徒数、信徒率からみると、比較的にカトリックが展開している地域であることがわかるだろう。次章では、神戸におけるカトリック教会の展開を、都市形成との関係に言及しつつより詳細におついていくことにする。

4. 神戸の都市形成とカトリック教会の変遷

神戸が都市として発展するのは、幕末期の開港以降のことである。それまでの神戸は、写真1からもわかるように、生田神社を取り囲む森がある以外には、ほとんどが田畑として利用されており、一農村であったといえる。それまでの都市としての中心は兵庫であったが、神戸が外国貿易の拠点として開港されると、近代都市としての発展は、

居留地周辺を中心に進んでいくこととなったのである。

居留地の建設は 1867 年、日本と諸外国との間で締結された「兵庫並びに大坂に於いて外国人居留地を定むる取極」にもとづき徳川幕府により始められた。それは、それまでの中心である兵庫から 3.5m 離れた土地が当てられており、日本人と外国人の接触を極力回避することが目論まれていたことが指摘されている⁷⁾。当初は、神戸に居住する外国人を居留地内に制限していたが、徐々に港湾都市としての神戸の重要性が高まることによって、多くの外国人が来神した。次第に、神戸の外国人居留地は手狭になり、外国人の居住地は、その範囲から周辺へと拡大していった。それとともに、外国人のみならず、さまざまな日本人もその経済的發展に引き付けられるように神戸に集まり、居留地周辺に新たな市街地が形成されるようになったのである。

居留地の設置による都市の発展は、当然のことながらそこに住む人びとの生活様式にもさまざまな影響をもたらしていた。そのひとつとして、キリスト教の影響があげられるだろう。布教活動の方法としては、『七一新聞』といった週刊新聞の発行や、学校や医療施設の設置などといった教育・福祉事業の展開によるものであった⁸⁾。その効果によって、キリスト教は次第に神戸市民の間にも広まっていった。キリスト教の広まりは、人びとの道徳観にも影響を及ぼし、女性の家庭内の、ひいては社会的地位の向上を推進する運動となって現れ始めていた。教育・社会福祉活動の重視は、戦後においても一貫して展開されており、戦後直後の復興期には GHQ の以来によりフラナガン神父が来日し、孤児院建設などに尽力している。

明治期におけるキリスト教の拡大は、仏教や神道といった既存の宗教にとって脅威にもなり始めていたようで、キリスト教排撃運動を引き起こすことへとつながる。一例をあげると、1872 年にプロテスタントのユニオンチャーチが居留地にでき、その後キリスト教が解禁されると、元町西寄りに説教所を作って布教をはじめた。これに対して、湊川神社の宮司がその様子を探っていることが彼



写真2 『神戸又新日報』に掲載されたポンチ絵
注) 新修神戸市史編集委員会編 (1989), p. 337 より

の日誌にでてくるという。湊川神社とは、楠木正成を顕彰する神社として 1872 年に完成したばかりであり、社格は別格官弊社となっていた。

1894 年に日英通商航海条約調印を契機に、外国人の居住や就労の条件が変わり、いわゆる「内地雑居」問題が日本社会の関心事のひとつとなった。神戸においても、市民の間で 1899 年の実施後におこりうると考えられる諸問題が話題の中心となっていたようである。『神戸又新日報』では、1897 年に居留地廃止による内地雑居に関するポンチを全 24 回にわたって掲載している。そのなかで、キリスト教もテーマとして取り上げられている(写真 2)。そこに描かれた絵からは、内地雑居後には、教会がいたるところにでき、ゆっくりすることもできないほどに教会の鐘の音がうるさくてたまらないと読みとることができる。当時既に相当の勢いでキリスト教が市民社会への影響を及ぼしていたことが如実に示されているといえるだろう。このような社会的状況において、カトリック教会も徐々にその活動を広げ、居留地外へと教会が建設されていった。

神戸地区のカトリック教会の現況を第 2 表に示した。神戸地区は大阪司教区に所属し、現在は 11 の小教区からなる。そのうち 10 教会はパリ・ミッシン会が設立し、現在は大阪教区へ移管されている。六甲教会に関しては、イエズス会が司牧を担当しているが、同様に大阪司教区下の教会で

第2表 神戸地区カトリック教会一覧

教会名	信徒数	所在地	設立年	修道会	備考
神戸中央教会 (中山手教会)	829	①	1999		中山手・下山手・灘の三教会の統合による。 神戸最初の教会。当初は、居留地に設立。 神戸における最初の日本人対象の教会。
(下山手教会)	—	①	1868	パ	
(灘教会)	—	②	1885	パ	
	—	③	1951	パ	
六甲教会	1940	④	1939	イ	下山手教会から分離。 下山手教会の巡回教会として始まる。 旧須磨教会。現在地への移転にともない一部たかとりへ。
住吉教会	862	⑤	1935	パ	
兵庫教会	361	⑥	1955	パ	
たかとり教会	656	⑦	1927	パ	
鈴蘭台教会	780	⑧	1956	パ	
北須磨教会	576		1951	パ	
垂水教会	1123		1942	パ	
明石教会	1421		1950	パ	
三田教会	759		1948	パ	
洲本教会	160		1955	パ	

注) 信徒数はカトリック中央協議会(2000)、設立年および備考については山野(2002)。所在地番号は、第2図の○数字に対応。修道会は、各教会を創立した修道会の区分(パ:パリ・ミション会、イ:イエズス会)。

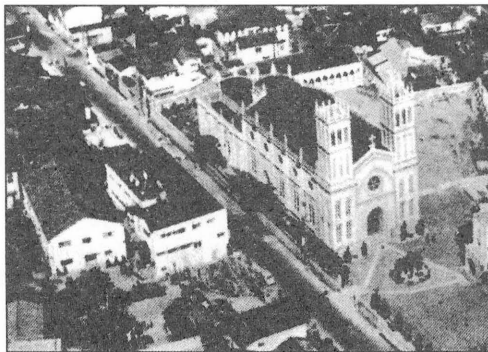


写真3 震災前の中山手教会

注) カトリック大阪司教区(1966)、p.24より

ある。六甲教会は、大阪教区内においては、夙川教会に次ぐ信徒数を抱えている。

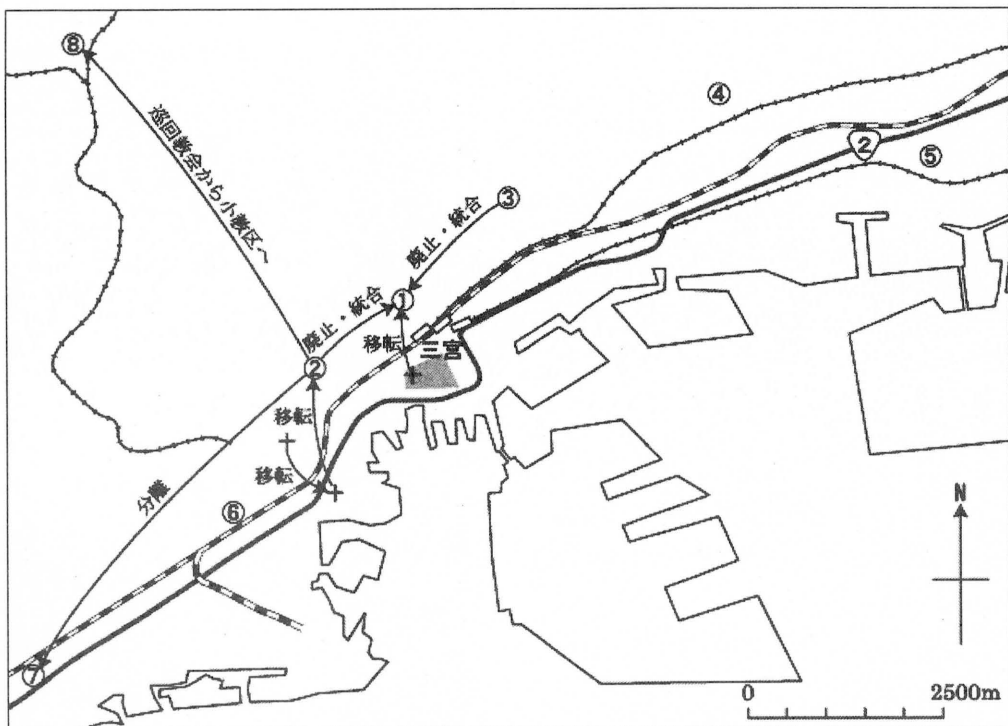
本稿で対象とするカトリック神戸中央教会は、1999年に旧中山手教会、下山手教会、灘教会の3教会が統合し新たに作られた。その契機は、1995年の阪神・淡路大震災により、下山手の聖堂が全壊、中山手の聖堂は半壊に留まったものの、ひびが多く2年後には取り壊され、灘教会は一部損壊であった。そして、中山手教会跡地に神戸中央教会として新たに教会が建設された。

前章で少し触れたように、神戸で最初に建設されたのは、この中山手教会の系譜となる居留地仲町37番の「三宮教会」である。1868年に伝道所、1870年に三宮教会として聖堂を建設したムニク一神父の活動は、居留外国人を対象としたもので

あった。同教会は、1923年に居留地仲町37番から中山手通1丁目に移転し、写真3にあるようなゴシック風建築の新たな聖堂が建築された。ただし写真の聖堂は、戦後に再建されたものである。この教会では、戦後まで外国語のみのミサが行われていた⁹⁾。

一方で、浦上四番くずれで流配されたキリシタンや神戸周辺のキリシタンらが三宮教会へ訪れたことで、キリシタンの存在を知ったことや、1873年にキリスト教が解禁されたことにより日本人への布教活動が行われるようになった。1885年、ペリン神父が生田区(現中央区)多聞通鎮台筋に借家を借りて、神戸地区において初めて日本人向けの説教所を設置した。その後、1896年には兵庫区西出町478番地に移転し、仮聖堂が設けられている。さらに、1899年に神戸市長に対し、ペリン神父が神戸監獄跡(下山手7丁目)1500坪の土地の払い下げを願い出て、1901年に許可されると、同地に司祭館を建設、同師が居住し本格的な布教活動が開始される。この教会が、旧カトリック下山手教会である。天主堂の完成は、1910年である。1927年には同教会からカトリック鷹取教会(現カトリックたかとり教会)が分離している。

このように、外国人向けとして戦後まで展開した中山手教会は、居留地に始まり、移転後も外国人の住宅が立ち並ぶ北野の南に位置してきた。一方で、日本人向け教会として始まった下山手教会



第1図 神戸におけるカトリック教会の立地とその変遷

注) ○数字は、第2表の所在地番号と対応。「+」は旧聖堂跡を、矢印は教会立地の変遷、分離を示す。

灰色で示した区画は、旧居留地である。

は、開港以前の都市の中心であり、近代期の盛り場でもあった新開地周辺がルーツとなっている。

5. 教会と共同体・アイデンティティ

前章でみたように、都市内部での教会立地は、都市形成の過程とともに変遷していくことがわかる。その変遷を第1図に示した。現在のカトリック神戸中央教会は、震災後に3つの教会が統合したものである。特に注目されるのは、外国人向けの教会として出発し旧居留地に設立された三宮教会に起源をもつ旧中山手教会と、明治期にキリスト教の解禁と内地雑居によって日本人を対象とした布教の拠点として始まった旧下山手教会である。旧中山手教会の展開は、旧居留地から中山手への移転に留まるが、旧下山手教会の場合、多聞通から西出町、そして下山手へと移転する。さらに、鈴蘭台教会が下山手の巡回教会から始まり、独立した小教区として成立していることや、たかとり

教会が分離して同じく小教区として成立しているのである。このように、同じく明治期に創設された中山手教会と下山手教会の二つの教会のその後の展開の差異は、それぞれの教会共同体を形成している信徒の属性の差異によるものと考えられる。主に外国人向けとして戦後まで長らく続いた中山手教会の共同体は、居留地や北野周辺に居住する外国人が主要な構成要素をなしていたのに対して、下山手教会が、日本人向けの教会として設立されたことから、まだ教会がない周辺地域の求道者や信徒はおのずと下山手教会のミサに参加することとなった。つまり、中山手教会に比べ下山手教会が日本社会への布教活動の拠点として位置し、その後の鈴蘭台教会やたかとり教会が派生する条件を有していたといえる。

こうして異なる特性を有しながら展開してきた両教会は、震災の被害により1999に廃止され、灘教会も含め統合され、新たにカトリック神戸中

央教会が設置された。しかし、この統合に際しては、信徒のなかから多くの反発があった。カトリック大阪司教区の復興計画は、信徒に事前に知られることなく突然発表された。その計画内容が、『中外日報』1995年2月28日付けの紙面に「震災のカトリック教会 ハダカになって再建へ 思い切ったリストラ策 他教団にも大きな示唆」という見出しで掲載されている。そのなかで、「倒壊・損傷した聖堂・司祭館などは早急な再建・修理をめざすが、神戸市中央区にある中山手、下山手、灘の三教会は「神戸中央教会」に一本化する。このため二つの教会が削減される」。そして「神戸市中央区の三教会統合に伴い、同市北区、西区など、人口が急増したのに教会の少なかった地域に、新しい宣教拠点の建設をめざす」ことが掲げられている¹⁰⁾。

下山手教会の信徒は、廃止・統合に際して『カトリック下山手教会献堂 88 周年記念誌』を発行している。この記念誌内において、多くの信徒が自らの教会共同体が解消されることへの不安や危機感を記しているのである。また 1995 年 3 月 26 日付けの『カトリック新聞』には、同教会の村田正雄氏の「共同体なくすの残念」という記事が掲載されている¹¹⁾。

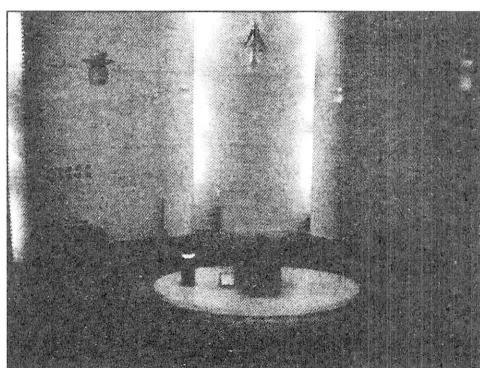
ここで述べたいことは、この統合問題の是非ではなく、この問題がいかに地理学的に問うべきものであるかであり、ひとつの教会共同体として現在ある神戸中央教を取り上げる際の、共同体内部の多様性や宗教的アイデンティティの視座の必要性にある。カトリックが、ヴァティカンを頂点として全世界の教会が同一の教義、あらゆる教会が普遍にキリスト者の共同体としてひとつであると同時に、その普遍ゆえに、全世界の多様な人びとの生活様式、価値観、地域性を捉えること、つまりはそれぞれの教会という宗教空間内の実践のみならず、それとそこを超えた信徒達の社会的、文化的いとなみとのつながりに注意を払う必要があるのである。地理学においては個人の経験という点で、宗教を扱う難しさがあるのであるなかで、われわれは、カトリックという、均質的、一枚岩的共同体のなかに、同質的経験が存在していると

写真4 旧中山手教会時代の聖堂内部の様子



注) 神戸中央教会信徒蔵。

写真5 神戸中央教会の聖堂内部の様子



注) 筆者撮影 (2008 年 3 月 9 日)。

いう認識に対して常に異議を唱えることが重要となるのである。

6. カトリックの布教方針と教会建築

最後に、カトリック神戸中央教会の特徴について述べることにする。統合問題を経て、1999 年に新たに生まれたカトリック神戸中央教会の聖堂の形態は、以前そこに堂々としたゴシック風の姿を見せていた中山手教会のそれから大きな変貌を遂げている。写真4が、以前の中山手教会の聖堂内部の様子であり、写真5が現在の神戸中央教会の聖堂内部である。両者の違いが一目瞭然であろう。古くからあるカトリック教会の多くは、前者の形態である。その特徴は、真上から見取り図的に捉えれば、十字架の形をしており、前部に祭壇が設けられていた。そのため、司祭は信徒に背を向け

て、つまり司祭と信徒が同じ前部の十字架と祭壇に向ってミサは行われていた。その様子は、この写真からも確認することができる。この形態は、聖職者の特権性、カトリックのヒエラルキー的組織体系が表象されているとして批判の対象となっていた。

それに対して、現在の神戸中央教会の聖堂の形態は、円形となっており、祭壇を中心として、司祭、信徒が互に向い合いミサが執り行われる。また、祭壇の高さは、旧来の形態では一段高められ、一般信徒と聖職者の間に明確な区別がなされていたが、現在は、祭壇が一番低い位置にあり、そこから緩やかな勾配がつけられ、会衆用の長いすが放射状に広がっている。この変化は、第2ヴァティカン公会議¹²⁾において、カトリック教会の自己改革として、従来の閉鎖主義を撤回し、開かれた教会が目指されることによる。改革の具体的内容は、典礼の改革、信教の自由、教会一致運動、諸宗教との対話、地域の文化に根ざして福音宣教などである。当会議による改革により、信徒使徒職の方針も模索され、従来の聖職者と平信徒との区別が緩和され、すべての信徒が司祭とともに神の教えに基づき働くことを意味する。これは、聖職者の減少という現代的問題とも向き合うものであり、宗教的建築は、教義に基づく宗教のもつ世界観が表現される空間であると同時に、聖職者と平信徒の区別の変化という宗教共同体内の「社会」構造の変化をも読みとることができるのである。

7. おわりに

以上のように、本稿では、神戸のカトリックの展開を事例として取り上げながら、地理学における宗教研究の枠組みについて言及してきた。紙幅の関係上、個々の事象に関して綿密な分析を行うことはできず、予察的考察に留まったといわざるを得ないが、宗教地理学研究のひとつの展望を示すことを試みた。

地理学という立場から宗教と社会との関係について注目することは、宗教を通したアイデンティティの具現化の場面のみならず、宗教的実践と社会構造のプロセスとの相互関係というより複雑で

多面的な点を、空間や場所、スケールという概念に注目しながら展開することを可能とすると考える。もちろん、エスニシティや国家、地域社会、宗教間あるいは宗教内部の多様性といった自己と他者の流動的な境界など検討すべき課題はいまだ多く残されている。

そうしたなかで、神戸は、カトリック教会以外にも、よく知られるところでは、神戸モスクやジャイナ教寺院、シナゴーク、プロテスタント各派の教会、ハリストス教会、関帝廟、諏訪山稻荷神社のほか、生田神社などの神社仏閣と、数多くの宗教施設が存在しており、多宗教都市ともいえる。そして、こうした宗教地理学的アプローチから、神戸における個々の宗教と空間、場所、社会、アイデンティティに関する研究を進め、多様な人びとの生活を明らかにすることで、異文化理解、多文化共生に貢献することができるのではないだろうか。

付記

本稿の作成にあたり、カトリック神戸中央教会、カトリック六甲教会のみなさまにお世話になりました。心より感謝いたします。

注

1) Springfield, Mass', Webster's Third New International Dictionary, G. & C. Merriam Company, 1961.

2) 宗教現象の定義に関しては、デュルケム(1983)が、ミューラー(1990)の定義の再検討を行いながら整理している。日本では、宗教学者の岸本英夫(1961)が行っている。また聖と俗に関する議論では、宗教学者のエリアーデ(1974, 1993)や文化人類学のリーチ(1981)を参照されたい。

3) Braceほか(2006), p. 29 参照。

4) 村上(1988), p. 217。末木(2006)によれば、30~40万ともされる。

5) 浦上四番くずれは、長崎でおきた最後のキリシタン弾圧である。「くずれ」とは、キリシタンの検挙事件をさし、「大量検挙によって潜伏組織が崩

壊に瀕したこと」(片岡(1979), p. 537)を呼ぶ。
 浦上では、1790(寛政2)年、1842(天保13)年、1856(安政3)、1867(慶応3)の4度のくずれがおきている(村上(1988), p. 252)。
 6) 浦上(1973), p. 320。
 7) 新修神戸市史編集委員会(1989), p. 21。
 8) 前掲7), p. 36-42。
 9) 筆者聞き取りによる。
 10) 『中外日報』1995年2月28日
 (http://www.lib.kobe-u.ac.jp/directory/eqb/serial/chugai/html/0702/0228/07-02-28_18.html)。
 11) 村田正雄「共同体なくすの残念」(『カトリック新聞』, カトリック新聞社, 3324号, 1995)。
 12) 第2ヴァティカン公会議とは、1962年から65年にかけて、カトリック教会の全面的な改革を目的として開催された会議である。司教だけではなく、カトリック以外のキリスト教徒も大勢招かれている。

参考文献

浦上和三郎(1973):『浦上切支丹史(復刻版)』, 国書刊行会(原本1943)
 エリアーデ(1993):『聖と俗』, 法政大学出版局(初版1969)
 片岡弥吉(1979):『日本キリシタン殉教史』時事通信社
 カトリック大阪司教区編(1966):『カトリック大阪司教区・宣教100年・大阪教区史』, カトリック大阪司教区
 カトリック中央協議会(2000):教勢調査(統計)(<http://www.cbj.catholic.jp/jpn/data/00static.htm>), 2003年12月4日閲覧。
 岸本英夫(1961):宗教学の紹介(文部省調査局宗務課『宗教の定義をめぐる諸問題』, 文部省調査局宗務課) pp. 1-84
 「神戸と聖書」編集委員会(2001):『神戸と聖書 神戸・阪神間の450年の歩み』, 神戸新聞総合出

下山手教会八十八周年記念誌編集委員会版センター(1999):『カトリック下山手教会献堂88周年記念誌』, 下山手教会
 新カトリック大辞典編集委員会(1996):『新亜カトリック大辞典 第1巻』, 研究社
 新修神戸市史編集委員会(1989):『新修神戸市史歴史編4:近代・現代』, 神戸市
 末木文美士(2006):『日本宗教史』, 岩波書店
 総務省統計局(2001):『平成12年国勢調査全国都道府県市区町村別人口及び世帯数(確定数)』, 総務省統計局
 ソーファール(1971):『宗教地理学』, 大明堂
 デュルケーム(1983):宗教現象の定義, 小関藤一郎編訳『デュルケーム宗教社会学論集』, 行路社, pp. 59-94
 ミューラー(1990):『宗教学入門』, 晃洋書房
 村上重良(1988):『日本宗教事典』, 講談社
 山野良子(2002):『大阪のキリスト教 カトリック大阪教会史年表 1868年~2000年』, 新平野の会
 リーチ(1981):『文化とコミュニケーション』, 紀伊國屋書店
 Brace, C et al. (2006): Religion, place and space: a framework for investigating historical geographies of religious identities and communities, Progress in human geography 30-1, pp. 28-43
 de Blij, Harm J. and Muller, Peter O (1986): Human geography: culture, society, and space 3/E, John Wiley & Sons, p. 181
 Kong, L. (2001): Mapping 'new' geographies of religion: politics and poetics in modernity, Progress in Human Geography, 25, pp. 211-233
 Tuan, Y (1978): Sacred space: Explanations of an idea (Karl W. Butzer, ed., Dimensions of Human Geography, p. 93) Chicago: University of Chicago, Dept. of Geography

(さかの ゆうすけ・武庫川女子大学関西文化研究センター 研究員)